

1830年代における *Journal des Dames et des Modes* の 編集とメディア機能

大澤 香奈子, 木岡悦子*

(名古屋女子大学家政学部, *甲南女子大学名誉教授)

原稿受付平成17年4月4日; 原稿受理平成17年10月1日

The Roles of Editing and the Media in *Journal des Dames et des Modes* in the 1830s

Kanako OHSAWA and Etsuko KIOKA*

Faculty of Home Economics, Nagoya Women's University, Nagoya 467-8610

* Emeritus Professor of Konan Women's University, Kobe 658-0001

In this research, we studied issues of the 1830s' mode magazine *Journal des Dames et des Modes* as our source of material and, from the transition of its appearance and editing, discussed the effect of the media on this magazine. We analyzed both fashion plates and placed articles, paying particular attention to "mode" articles. Looking at its contents and the transition of its volume year by year, we tried to find out the place of "mode" in the magazine. The magazine renewed its cover design in 1835, and changed the allocation of "mode" articles. Although this magazine carried articles on various fields, including events held by the polite society, life-related matters, stage arts, literature, *etc.*, comment on current trends and articles about "mode" occupied the highest ratio of pages, enabling us to recognize the importance of "mode" and commentary on it. We were also able to recognize that this magazine was a source of acquiring practical knowledge about social life of the time. On the other hand, a look at the closing issues of the magazine revealed a new trend in the relationship between the magazine and the media in those days, including cooperation with other companies.

(Received April 4, 2005; Accepted in revised form October 1, 2005)

Keywords: *Journal des Dames et des Modes* ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード, Mode magazine モード誌, 1830s 1830年代, fashion plate ファッションプレート, media メディア.

1. 緒言

技術革新による印刷法の改良等から出版業界が大きく発展した1830年頃、情報や思潮の中心的媒体として、雑誌メディアは当時の社会と大きくかかわる存在であったと思われる。このことは「七月革命の口火を切ったのは『ナショナル紙』に集結したジャーナリストたちである。」¹⁾といわれたことから窺える。

著者らは既にモード誌『ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード』*Journal des Dames et des Modes* (以下JDM)の1830年から1832年刊行分を資料として、産業革命と市民革命等による社会転換期を背景とするロマン・スタイルと当時の女性像について考察した²⁾。本報では、さらに1833年以降から終刊直前の1838年12月までの資料を加え、1830年代のJDMの体裁と

編集の推移から、情報発信の中心的媒体としての本誌のメディア機能の効果を検討した。これについては、ファッションプレートと掲載記事の双方からの解析を試みた。中でも創刊以来、掲載が継続されたMODES(以下「モード」とする)の項に着目し、その内容や体裁の年次的推移から雑誌メディアとしてのJDMが果たした役割について考察した。

なお、本分析は前報同様、甲南女子大学図書館が所蔵するJDMのうち、1830年から1838年に刊行された計648号分について行った。

2. 編集スタイルの推移と「モード」の位置づけ

19世紀モード誌においては、社交界や巷の流行の動向を伝える時評欄が盛り込まれたものが多い。『ラ・

シルフィード』には「パリだより」*Lettres parisiennes*, 『ヴォールール』にはバルザックが担当した「パリの手紙」*Lettres sur Paris* という時評欄がある。JDMのライバル誌と目される『ラ・モード』には、「淑女通信」と題されたコラムがあり、パリの上流人士の動向や生活についての情報が発信される³¹⁾といわれている。さて、本誌JDMでは、1797年の創刊当初から「モード」が設けられている。ここでは巷の装いの批評や噂話や

様々な流行がまとめられ、連載されている。本誌タイトルとする *Journal des dames et des modes* の *modes* とは、生活様式などの慣習或いは生活の様相をも含む広義なもので、それらは上流階層者の生活に焦点をあてたものであろうと考える。これに対し、リアルタイムのニュースを盛り込んだ連載記事「モード」は、狭義な意味として用いられているといえる。著者らはこの「モード」を本誌時評欄として取りあげ、その「モード」にみる編集の特徴について、以下に検討を試みた。

「モード」の項は創刊から1835年までは常にラストニュースとして扱われていたが、1835年からはそれがトップに配置されている。また、「モード」が各号の誌面に占める割合について、1830年代を通してその推移をみると、1835年に至るまでは増加の一途をたどり、1834年には増加のピークがみられる(図1)。この増加傾向と1835年の配置の変更はどのような理由によるものであろうか。そのことについて検討を加えると、「モード」の配置が変更された1835年の編集では、まず表紙の一新があげられる。表紙の装飾文字はこれまでも多少変更があったが、この年は、それまでの装飾文字のみのレイアウト(図2)から版画絵を入れたレイアウト(図3)へと一新され、1835年、創刊以来初めて挿絵入り表紙が登場したのである。また、この頃には記事の担当者のサインが記されるようになったこともあげられる。1834年の60号のトップ

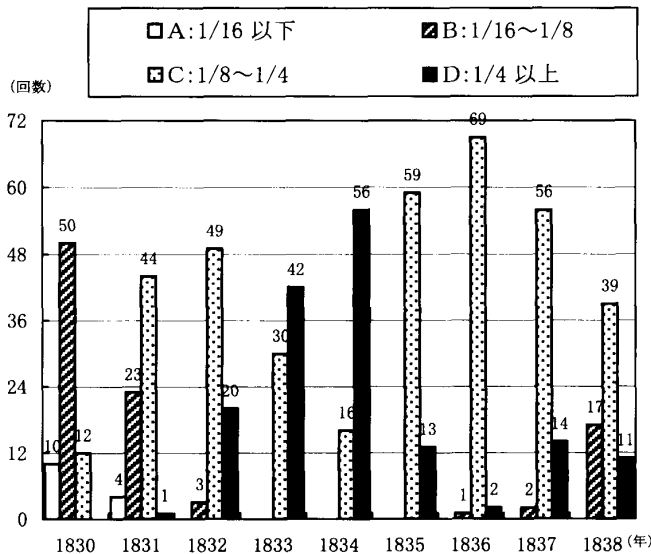


図1. 「モード」が誌面に占める割合の年別推移

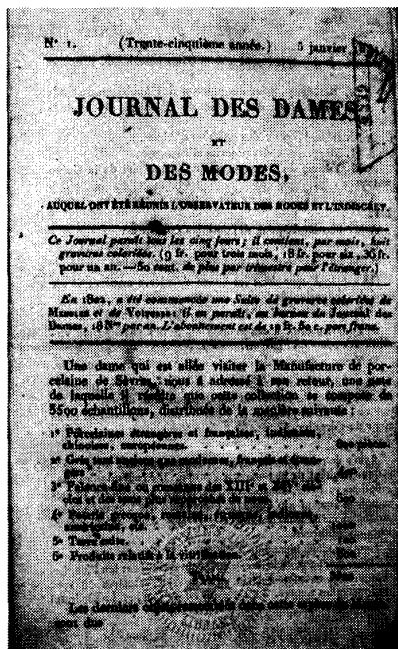


図2. 装飾文字をレイアウトした表紙(1831) 甲南女子大学図書館蔵。

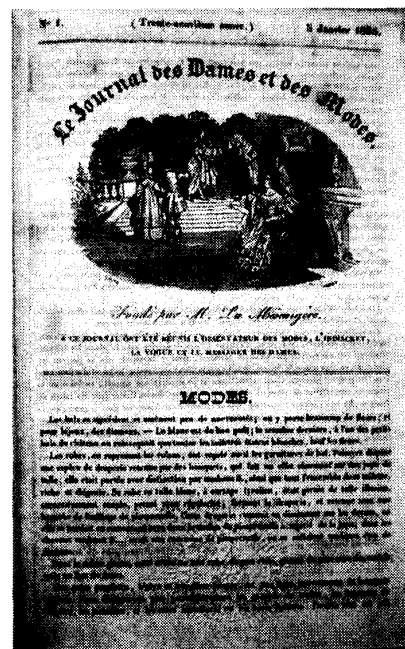


図3. 版画絵をレイアウトした表紙(1835) 甲南女子大学図書館蔵。

1830年代における *Journal des Dames et des Modes* の編集とメディア機能

表1. 「モード」の項にみられるサイン

号数	1835	1836	1837	1838
1		SARAH DALTON	M.	M.
2			M.	M.
3		EDWARD	M.	M.
4	SARAH DALTON	SARAH DALTON	M.	M.
5	SARAH DALTON	SARAH DALTON	M.	M.
6	SARAH DALTON	SARAH DALTON	M.	M.
7	SARAH DALTON	SARAH DALTON		M.
8	SARAH DALTON	SARAH DALTON		M.
9	EDWARD	EDWARD	M.	M.
10		SARAH DALTON	M.	M.
11	SARAH DALTON	SARAH DALTON		M.
12	SARAH DALTON	SARAH DALTON	M.	M.
13	SARAH DALTON	SARAH DALTON	M.	M.
14	Cécile de NELGIS	SARAH DALTON		M.
15	EDWARD	EDWARD	M.	M.
16	SARAH DALTON	SARAH DALTON		M.
17	SARAH DALTON	SARAH DALTON		M.
18	SARAH DALTON	SARAH DALTON		M.
19	SARAH DALTON	SARAH DALTON	M.	M.
20	SARAH DALTON	SARAH DALTON	M.	M.
21	EDWARD	EDWARD	M.	M.
22	SARAH DALTON	SARAH DALTON	M.	M.
23	SARAH DALTON	SARAH DALTON		M.
24	SARAH DALTON		M.	M.
25	SARAH DALTON	M.	M.	M.
26	SARAH DALTON	M.		M.
27	EDWARD	M.	M.	M.
28	SARAH DALTON	M.		M.
29	SARAH DALTON	M.		M.
30	SARAH DALTON	M.		M.
31	SARAH DALTON	M.	M.	M.
32	SARAH DALTON	M.	M.	M.
33	EDWARD	M.	M.	M.
34	SARAH DALTON	M.	M.	M.
35	SARAH DALTON	M.		M.
36	SARAH DALTON	M.		M.
37	SARAH DALTON	M.		M.
38	SARAH DALTON	M.	M.	M.
39	EDWARD	M.	M.	M.
40	SARAH DALTON	M.	M.	M.
41	SARAH DALTON	M.	M.	M.
42	SARAH DALTON	M.	M.	M.
43	SARAH DALTON	M.	M.	M.
44	SARAH DALTON	M.	M.	M.
45	EDWARD	M.	M.	M.
46	SARAH DALTON	M.	M.	M.
47	SARAH DALTON	M.	M.	M.
48	SARAH DALTON	M.	M.	M.
49	SARAH DALTON	M.	M.	M.
50	SARAH DALTON	M.	M.	M.
51	EDWARD	M.		M.
52	SARAH DALTON	M.	M.	M.
53	SARAH DALTON	M.	M.	M.
54	SARAH DALTON	M.		M.
55	SARAH DALTON	M.	M.	M. MARIE DE L'EPINAY
56	SARAH DALTON	M.		M.
57	EDWARD	M.		M.
58	SARAH DALTON	M.	M.	M.
59	SARAH DALTON	M.	M.	M.
60	SARAH DALTON	M.	M.	M.
61	SARAH DALTON	M.	M.	M.
62	SARAH DALTON	M.	M.	M.
63	EDWARD	M.		M.
64	SARAH DALTON	M.		M.
65	SARAH DALTON	M.	M.	M.
66	SARAH DALTON	M.		M.
67	SARAH DALTON	M.		M.
68	SARAH DALTON	M.		M.
69		M.		M.
70	SARAH DALTON	M.		M.
71	SARAH DALTON	M.		M.
72	SARAH DALTON	M.		M.

表2. *Journal des dames et des modes* にみられる記事担当者のサイン

サイン(アルファベット昇順)	1834	1835	1836	1837	合計(頻度)	
A. G.		1			1	
A. DE BORNSTEDT				1	1	
A. S SAINT-VALERY		1			1	
A. SENEZ				1	1	
ACHILLE JUBINAL			1		1	
ADELE JANVIER		3			3	
ALEXANDRE GUIRAUD DEL'ACADEMIE FRANCAISE				1	1	
ALTAROCHE (CHARIVARD)		2			2	
ANTONY DESCHAMPS		1			1	
ARMAND DE CROCHARD		1			1	
AUGUSTA DE SOUTH				1	1	
AUGUSTE MARTIN		2			2	
BENEDICT GALLET		3	4	3	10	
BONAPARTE	1				1	
C. DE C.		1			1	
C. B.				1	1	
CÉCILE DE NELGIS		1			1	
CLÉMENTE. R.			2	1	3	
DE BALZAC			3		3	
DE SAINT - ELMONT.				1	1	
EDOUARD		2	1		3	
EDWARD		9	3		12	
EMILE DE SAINT-HILAIRE				1	1	
EMILE DESCHAMPS	2	6	5	3	16	
EMILE MARCEL		1			1	
EVARISTE BOULAY - PATY		1	1		2	
F. C. DE DAMERY		1			1	
FREDERIC SOULIE				1	1	
HIPPOLYTE LUCAS.			4		4	
HUG ^{de} DE SAINT - AMAND			1		1	
JULES DE SAINT-FÉLIX		1			1	
JULES JANIN			1		1	
JUSTIN - GENSOU				1	1	
LA COMTESSE DE BRADI	*	1	3	4	12	
LE COMTE DE G				1	1	
LE COMTE JULES DE RESSEGUIER	1	1	1		3	
LÉON GOZLAN.				1	1	
LOUISA SYLVANIE				1	1	
LOUISE COLET, NÉE RÉVOIL				1	1	
M.	*		30	56	86	
M ^{de} L.	*		17	3	20	
MADAME AMABLE TASTU		1	1		2	
MADAME DAL'ENHEIM (GABRIELLE SOUMET)				1	1	
MADAME SUZANNE V				3	3	
MARIE DE L'EPINAY, NÉE DE BRADI	*	2	7	18	16	43
M ^{de} C. R.	1				1	
M ^{de} CLÉMENTE ROBERT			1		1	
M ^{de} LOUISE HLTZ		9	4	2	15	
M ^{de} CONSTANCE D'PLESSIS				1	1	
M ^{de} DE BAWR			1		1	
M ^{de} DE SBORDES-VALMORE		1			1	
M ^{de} JOSEPHINE LEBASSU.	1				1	
M ^{de} JOSEPHINE LEPASSU.				1	1	
M ^{de} LE BASSU d'HELP				1	1	
M ^{de} A. D.		1			1	
M ^{de} ELISE VOLART		1			1	
M ^{de} JOSEPHINE LEBASSU D'HELP				1	1	
N.				1	1	
NICOLÒ PAGANINI				1	1	
P. D.	1				1	
PAUL DE KOCK				1	1	
SARAH		54	16		70	
SOPHIE CONRAD				2	2	
T. B.		1			1	
T. G.	**	1	35	18	8	62
T. GOULLET	**		12			12
THADDÉE BULGAINE				2	2	
TROLED				1	1	
UN GENTILHOMME VÉNITIEN				1	1	
V. B.		1			1	
VICOMTE DE CHATEAU BRIAND				1	1	

*, **: 同マークを付けたサインは同一人物と思われる

記事「パリの公園」において、初めて *Mlle C. R.* というイニシャルでのサインがみられる。この60号の「パリの公園」は前々号58号に掲載された「パリの公園」に続く後半であると記されていることから、サインが認められなかった58号の「パリの公園」も *Mlle C. R.* の手によるものと推察できる。この後は、全てのトピックにサインがみられるわけではないが、担当者のサインが明記される傾向が見受けられる。「モード」記事担当者においても1835年4号に *Sarah Dalton* のサインが記されている。この年の「モード」のほとんどはこの人物によって綴られている。それ以後の「モード」には、*Sarah*, *Edward*, *Cécile de Nelgis*, *Marie de L'Epina*y のサインと、*M* とだけ記された

ものがあるが、1836年5月以降の「モード」担当者としては *M* のみがみられる(表1)。

本誌記事の主な執筆者としては7名があげられる。その他にロジェ・ド・ボーヴォワール、バルザック、シャトブリアンといった作家、文化人を含む多数の名前もみられる(表2)。中でもロジェ・ド・ボーヴォワールは『ラ・モード』や『ラ・シルフィード』等多数のモード誌の時評欄を担当している。『ラ・シルフィード』の時評「パリだより」の掲載に当たって、編集者ヴィルメッサンに、「彼の協力なしにファッショナブルな新聞を作るなど想像もできない」⁴⁾と言わしめた彼とは、すなわちロジェ・ド・ボーヴォワールなので

表3. 分類項目とトピック

分類項目	トピック	分類項目	トピック	
告知広告	案内 広告* 死亡告知* 正誤表	舞台芸術	あるバレエダンサー ヴォードヴィル劇場 オペラ座 コメディ・フランセーズ ジムナズ座のミュージカル タリオーニの再登場 テアトル* テアトル・ド・マダム ドラマティック座の夜公演 バヤデルのタイトルロール... パレロワイヤル劇場 ベルゴレージのスターバト レビュー・デ・テアトル* レビュー・ドラマチック* ロッシーニとメイエベル ...etc	
時評	モード* コラム* 通信*		文芸	哀歌 雑録 詩(各題省略) 叙事詩 新刊案内 即興詩人 ソネット ミステリーとファンタジー リテラチュール*
社交界・催事	オペラ座仮面舞踏会 オペラ座舞踏会 最近訪れたサロン シャンゼリゼのコンサート 昼の舞踏会 舞踏会 舞踏会の様子 舞踏会への招待 夜会のための指南 ラフィットホテルとコンサート ロンシャン ロンド ...etc		社会問題・生活	ある女性の手紙 格言* 語源解説 古代ローマ将軍カミルス 死の前日 聖ベルナルド山 マダム・マリブランのレクイエム 名譽回復 有名な三人 予約購読者 ...etc
	イタリアモード 気球船 クリスマスの贈り物 競馬 現代の消灯時間 コレットとジゴ袖 産業博覧会 ナポリシルクのプリント生地 葉巻の権力 パリジェンヌの習慣 パリジャンの喫煙 パリの公園 ブキニスト プロヴァンスの情景 店の紹介* ...etc	その他		

※: 複数回掲載があったもの

ある。その彼が1836年にはJDMに記事を3回寄せている。例えば40号の「でんぷん糊の発見」では『ル・シエクル』の記事を引用しているものの、4頁余りの記事を寄せていることは、当時必要とされた情報であったと考えられる。そこでは、でんぷん糊の発見の地フランドルと記され、エリザベスI世の肖像に倣った巨大なコレットに利用されたことが、当時の政治的背景を絡めて説明されている。コレットの整形において、それまでの針金に代わって使用された糊の効果が興味あるトピックとなったと思われる。また、市場に出回るモスリンや薄織木綿を使ったボリュームある形状を保つために効果的である糊が関心を惹いたのではないだろうか。その他、彼の記事として服飾品の造形について記した48号の「フランスの金銀細工の歴史」等がある。

バルザックのJDMへの寄稿は1836年に集中してみられ、「エレガントな男性と流行にのる男性の対比」⁵⁾があげられる。そこにはエレガントな男性の条件について、知識があり友人を持ち、身体つきは優雅で名前は優雅で呼びやすいこと等とある。また、「ブドワールのインテリア」⁶⁾では部屋の形に始まり、家

具調度品、そしてプランターの花に至るまで、具体的に細やかに解説されている。例えば、「部屋は優雅な曲線を描いた馬蹄形で、本物の東洋風寝椅子が備えられ、それには黒と深紅色の小さな房飾りが目立っている。床には赤い布地が広げられ、その上にインドモスリンがひかれ、モスリンの下の赤い布地が透けて、ピンク色になってみえる。家具類は白いカシミアの布で覆われ、黒と深紅色の装飾で引き立てられている。掛け時計、大燭台はすべて白と黒の大理石製。エレガントなプランターには様々な種類のバラ、白、赤の花がある。」⁶⁾とある。部屋全体の白黒赤の調和やインテリアについて、とりわけ色彩に印象付けられた様子や生活様式と関心度が窺える。バルザックはこの頃既に『あら皮』、『私生活情景』、『風流滑稽譚』を出版しており、加えて『ラ・モード』への「優雅な生活論」の寄稿等から知名度は高く、著名なジャーナリストの一人であったのである。他に、本誌に寄稿しているシャトーブリアンは「恋文」を出している。彼は高官としても世に知られている人物である。このように、当時の話題性の高い著名人の記事が掲載されているということは、読者の関心を喚起するために力を入れて意図

1830年代における *Journal des Dames et des Modes* の編集とメディア機能

的に編集されたものと推察される。社会的にも認められた著名人の起用は本誌の格式をも高めることに繋げたいという期待がよせられていたと解する。

JDMは1837年57号からタイトルが『ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード、ガゼット・デ・サロン』に改められた。これは『ガゼット・デ・サロン』との合併によるものである。合併後の1837年内は、誌の体裁はこれまでのJDMと大きく変わらなかったが、同年71号(12月25日刊行)以後、「モード」は不規則な配置となっている。さらに1838年からはそれまでの8頁構成が16頁構成となり、これまでの「モード」は消え、JDMの体裁が失われた。その1年余り後に本誌は終刊に至っている。JDMにおける時評としての「モード」は、分量の推移やその扱われ方から本誌の構成の核を果たしてきたといえる。そこに誌の盛衰を語るバロメーターをみることができるといえる。

3. JDMの内容構成と情報

JDMの記事内容は極めて多岐にわたるが、その構成を記事の見出しからいくつかのまとまりに分類してみた。広告 *ANNONCES* や訃報 *NÉCROLOGIE* の告知等を「A告知広告」とし、コラム *CHRONIQUE* と通信 *CORRESPONDANCE* に前章で時評とした「モード」を併せて「B時評」。サロンの模様や舞踏会、社交行事と呼べる恒例のパレードのレポート等を「C社交界・催事」。政治内容や礼儀作法、慣習に関する内容を「D社会問題・生活」。舞台評や観劇レポート、芸術家についての内容を「E舞台芸術」。リテラチュール *LITTÉRATURE* や詩等を「F文芸」。これ以外を「Gその他」とした(表3, 図4)。

時評に属する「モード」「コラム」「通信」についてはそれぞれ継続的に掲載されており、巷の様々な流行が記されている。それは舞踏会の様子であったり劇場や庭園の様子であったりする。また、ローブの色や装飾と、時にその素材や帽子、髪型をも話題に取りあげている。

社交界の分野には、舞踏会やサロン、コンサートについてのトピックをあげることができる。ここでは舞踏会に出席した貴婦人や招待客の装いについて、特に目立った装いの様子や解説が詳しくなされている。催事の分野では、ロンシャンの散策があげられる。ロンシャン散策の経緯については『タブロー・ド・パリ』に、クララ会修道院への巡礼行に始まるとの説明がある⁷⁾が、他の資料には「ロンシャンの散策は社交シー

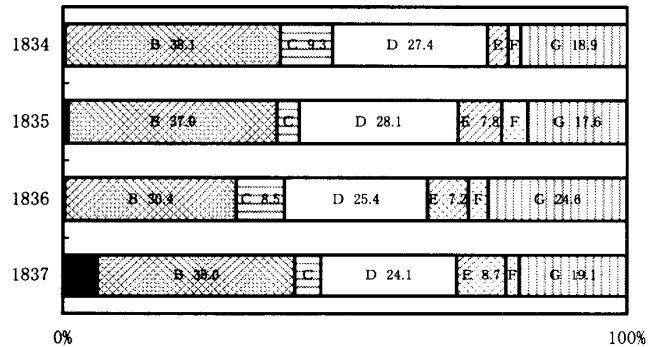
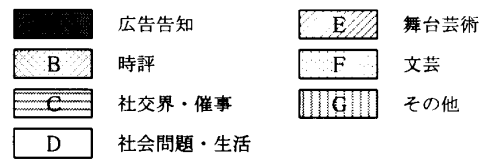


図4. 1834年から1837年の内容構成の内訳と配分

ズン(12月から復活祭まで)の終わりを告げる社交行事であり、新しいモードの大パレードともなっていた⁸⁾と説明されている。これに関する記事が毎年4月に掲載され、同時期にロンシャンでの装いを描いたファッションプレートが添えられている。この催しは当時の大きなニュースであったと考えられる。1830年と1834年のロンシャン散策にみられた装いについては図5に示す。1830年のプレートには、メゾン・ラヴィーニュの刺繍の入ったモスリンのローブ、チュールの飾り襟、ベルリンシルクのローブ、チュールのカンズー、メゾン・ボーヴェのブロンドレースとりボン飾りの帽子、チュールのシュミゼットと紹介されている。4年後の1834年のそれには、シルクのローブ、ブロンドレースのショール、フランスシルクの帽子に玉房飾りのついた毛織物のルダンゴト、フランスシルクのローブにタータンチェックのショール等が紹介されている。1830年はチュールがローブ、ブラウス、カンズー、袖、襟等に多用されているのに対し、1834年にはフランスシルクが用いられている。機械化が進んだ1830年頃にはレースは衣装に多用され、1834年にはフランスシルクが織機の開発⁹⁾により、それまでの衰退から復興に転じた兆しがあらわれている。

舞台芸術に関する分類にあがったトピックに「テアトル」がある。これは1835年初期まで掲載されている。その後は「レヴュー・ドラマチック」として掲載され、更に1835年後半からは「レヴュー・デ・テアトル」に替わって掲載されている。当時、オペラ座やイタリア座のボックス席では観劇の名目で社交界の人間模様が繰り広げられていた。本誌には「ボックス席



Costumes Parisiens No.2782 (1830)

甲南女子大学図書館蔵



Costumes Parisiens No.3170 (1834)

甲南女子大学図書館蔵

図5. ロンシャン散策の衣装

の2~3列目からは羽飾りや花飾りにレースを通してしか舞台は見えない¹⁰⁾とか、「席を融通してくれる美しい女性はいないものか¹¹⁾」等、劇場での美しい女性や衣装を彷彿とさせるモード誌らしい記事がみられる。舞台に関する記事はモード誌の構成トピックとして重要なものであると考えられる。

社会、生活様態に挙げたトピックでは、競馬や葉巻についてや、「パリジェヌの習慣」、「現代の消灯時間」といった当時の生活のありさまが記されている。当時、競馬場が上層階級の社交場であったことは、「競馬にふけることはエレガントな男性がなすことの一つ⁵⁾」とあることから窺える。競馬場での装いについて「近頃の競馬場では、ゴーズあるいはナポリシルクのキャポット帽の多くは麦藁を編んだ装飾がなされている。」¹¹⁾とか、「最近のシャン・ド・マルスの競馬場では、馬に乗ったご婦人が空色のカシミアのローブを身に着けていた¹²⁾」¹²⁾「ローブはとても短くパンタロンが見え、その下部には刺繍が装飾されている。そして黒色のピロードの編み上げ靴を履いていた。」¹²⁾とある。このように、男性だけでなく女性もまた競馬にかかわっていたことがわかる。それらから当時の興味や関心事、そのライフシーンを窺い知ることができる。

4. モード誌におけるメディア機能

ファッションプレートを掲載するモード誌が、当時の読者に向けて彼らが必要とする情報をどのように伝えたのか、情報メディアとしてのその役割を1830年代のJDMから拾ってみた。

モード誌の読者は上層階層者であり本誌も例外ではない。本誌の当初の発行部数は800程度とする資料もあり¹³⁾、当時としては平均的な数であったと推察される。表紙部分には「料金は3ヶ月9フラン、6ヶ月18フラン、1年36フラン、初め3ヶ月は50サンチーム増し」との購読料についての案内がある。ライバル誌と目される『ラ・モード』も1年分の編集雑誌の値段は36フランであり¹⁴⁾、当時の代表的な2誌が比較的安価な値で販売されていたことが分かる。本誌の美しいファッションプレートは絵に描いた餅ではなく、消費者がそれを手に入れ、身に着けて生活の中で生かせるように工夫されている。ファッションプレートに描かれたそれらを読者が手に入れたいとする。その購買意欲を駆り立て、それを手にするための方法について具体的に記す。本誌の編集はそれらに力点がおかれている。特に1835年の前半には、ほぼ毎号のようにギャルリーやパサージュに登場した数々の流行品店とその商品情報が「レヴュー・ド・マガゼン」に掲載されて

1830年代における *Journal des Dames et des Modes* の編集とメディア機能表4. 主な流行品店と広告商品点数 (資料は1833~1835の *Costumes Parisiens*)

メゾン	年	帽子				衣服				髪結い	その他
		chapeau	capote	bonnet	その他	robe	redingote	manteau/mantelet	その他		
Alexandre	1833									3	
	1834									1	
	1835				1					1	
Casaubon rue S ^t Fiacre 20	1833										2
	1834										2
	1835										1
Delisle rue de Choiseul	1833							1			
	1834	1	1			6	3				
	1835				1	3			1		
Gagelin rue Richelieu 93	1833					14	1	3	1		
	1834					7		2	2		
	1835										
Gleizal rue Dauphine 33	1833							1	3		
	1834							2	1		
	1835										
Hippolite rue Louis le Grand 35	1833					1				1	
	1834					5				3	
	1835										
Jouenne rue Grange Batelière 1	1833									5	
	1834									3	
	1835									6	
Larochelle rue de Choiseul 3	1833	5	1	1	2		1				
	1834										
	1835	3	1			1	1				
Lavigne boulvart Poissonnière 18	1833		1				1	1	2		
	1834					2		1	2		
	1835	1							2		
Lepetit rue Grange Batelière 30	1833	6		1							
	1834	4	1								
	1835	1									
Rome passage Choiseul	1833	1		1		2			2		
	1834		1			1			1		
	1835					2					
Sergent boulvart des Italiens 22	1833				1					4	
	1834									1	
	1835									11	
Victor Plaisir	1833									1	
	1834				1					1	
	1835										
Brousse rue recheleu	1833										
	1834										
	1835					1	1	1	3		
Jenny-Reybaud rue S ^t honore 338	1833										
	1834										
	1835					7	4				

いる。ファッションプレートのキャプションには、衣装はもちろん小物や結髪に至るまで、どの店の誰の手によるものが記されている (表4)。

名の挙がった流行品店の一つにメゾン・ガジュランがある。「最新の、最も優雅なフォルム、最も高価な布地すべてをメゾン・ガジュランが一手に引き受け、莫大な利益を上げていた。」¹⁵⁾とある。「メゾン・ガジュランから売り出されたオーガンディーのドレスは贅沢この上なく、かつ、今どきの簡素さにもマッチしている」¹⁶⁾との記述や「最新号で既にふれたこれらのマントはメゾン・ガジュランで特別に仕立て上げられている」¹⁷⁾等、この店の商品についての記述例が多い。ファッションプレート No. 3060 や No. 3223 (図6) は、そのメゾン・ガジュランの衣装例である。「絹や光沢の輝く生地を見る前に、メゾン・ガジュランに集まるギャラリーの人の多さに驚かされる」¹⁸⁾との記述が後の1846年の『ル・クレール』の「モード通信」にあるが、その頃もなお盛況であったことが窺える。素材や新規性の価値に加えて、メゾンのネームヴァリューという付加価値が商品に付帯される。それがモード誌を

介して成されているといえる。

JDMにおける「告知広告」の掲載分量については年次的な変化がみられる。中でも広告の掲載が1837年の後半から著しく増加し、1頁を埋めるほどになっている。主な内容としては商店の商品紹介である。1839年に創刊された『ラ・シルフィード』においては、ゲラン社の香水を滲みこませた、香るモード誌であったという¹⁹⁾²⁰⁾。1830年代後半頃のモード誌においては企業との協力関係なしには刊行しがたい状況であったと推察できる。つまり、当時の雑誌メディアが企業をスポンサーとする、或いはまた、企業とタイアップして刊行が成されるという、新しい段階に入ったと解することができる。

しかし、企業との関係を密にする一方で、1838年11月以降は発行日が乱れ、通常6回刊行されるところ、この月は3回しか刊行されない等、刊行状況に変化がみられる。本誌の大きな魅力の一つであるファッションプレートについては、他誌で既に紹介されたものが挿入されているのが目に付く。この頃には1830年代前半のリアルタイムのニュースの提供に比して、

1830年代における *Journal des Dames et des Modes* の編集とメディア機能

い方向を本誌は示していた。19世紀モード誌の代表として、そのスタイルが諸誌のモデルとされたJDMは、その編集において時代の流れとともに変化を余儀なくされた。読者である消費者に対し、彼らの欲求を刺激し表現させるための手立てを、企業との間に立って提示するといったメディア機能を果たしていた。当にいまに繋がるすがたを示唆するものであると解した。

引用文献

- 1) 山田登世子：『メディア都市パリ』，青土社，東京，63（1991）
- 2) 大澤香奈子，木岡悦子：1830年代初頭のファッションプレートにみる女性像と服飾表現，家政誌，53，581-592（2002）
- 3) 伊藤幸次：『バルザックとその時代』，渡辺出版，東京，159（2004）
- 4) Martin-Fugier, A.（前田祝一監訳）：『優雅な生活』，新評論，東京，464（2001）
- 5) *Journal Des Dames et des Modes*, 1836年30号，235「エレガントな男性と流行にのる男性の対比」*Parallèle entre l'homme élégant et l'homme a la mode.*, バルザックのサインがある。
- 6) *Journal Des Dames et des Modes*, 1836年38号，301「ブドワールのインテリア」*L'INTÉRIEUR D'UN BOUDOIR*, バルザックのサインがある。
- 7) de Bertier de Sauvigny, G.（鹿島 茂訳）：『タブロー・ド・パリ』，新評論，東京，160（1984）
- 8) Martin-Fugier, A.（前田祝一監訳）：『優雅な生活』，新評論，東京，417（2001）
- 9) 辻ますみ：『ヨーロッパのテキスタイル史』，岩崎美術社，東京，64-65（1996）
- 10) *Journal Des Dames et des Modes*, 1831年23号，178
- 11) *Journal Des Dames et des Modes*, 1830年50号，400
- 12) *Journal Des Dames et des Modes*, 1830年51号，408
- 13) 甲南女子大学図書館報，No 10，6（1995）
- 14) 伊東冬美：『ジラルダン夫人の生涯—フランス・ロマン派のミューズ』，ティビーエス・ブリタニカ，東京，83（1990）
- 15) *Journal Des Dames et des Modes*, 1832年39号，310
- 16) *Journal Des Dames et des Modes*, 1832年51号，406
- 17) *Journal Des Dames et des Modes*, 1832年58号，463
- 18) *Le Clerc*, 1846年1月15日号，「モード通信」
- 19) Martin-Fugier, A.（前田祝一監訳）：『優雅な生活』，新評論，東京，409（2001）
- 20) Barzilay, A.: *Au Paradis des Dames*, Paris-Musées, Paris, 57（1992）
- 21) 伊藤幸次：『バルザックとその時代』，渡辺出版，東京，163-165（2004）